

都・建設予定地 生活記 (1)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

「何故インドなのか」と尋ねられた時「インドに呼ばれたから」と答えるのは、きっとインドに魅せられている人たちだ。自分から行くのではない、インドが呼んでいるのだ。僕も大学時代は何度もインドに来たし、今はこの国で日本語を教えている。でもそれは僕の意志であって、インドに呼ばれたわけじゃない。ただグジャラートには誰かが呼んだのだ。そうじゃなきゃ、こんなとこ来ないから。

インドの西端、グジャラート州。禁酒と菜食主義を謳うこの州の州都、ガンディーナガルは最大の都市アーメダバードの中心から約 30km 北にある。州都とは名ばかり、モールなどひとつもない。モールどころか、僕がいる大学の寮の周囲 3km には野菜売りすらいないう荒野が広がっている。大きなモールへはオートリキシャーで 1 時間弱。部屋に入れば携帯は圏外表示。「住めば都」とは言うが、住んでもなかなか「都」にならない土地もある。

この前、そんな辺境の地で僕は大事件を起こしてしまった。パスポートを失くしたのだ。慌てて警察に駆け込んでみたら「失くしたのは俺らの責任じゃねえ。勝手に探せ」と門前払い。一気に嫌気が差した。もうグジャラートなんて知らん！と本気で思い、全てを忘れてデリーへ遊びに行った。首都デリーはまさに「都」だった。酒も肉もあり、携帯電波はローミング中なのにガンディーナガルより良好。天国か、と思った。

だからグジャラートに帰ってきた時の絶望感と言ったらなかった。ここはせめてお金を使って気を紛らわそうとたまに行く輸入食材店に足を運ぶと店主が「やっと来たな」とカウンターの下から何かを取り出した。赤い表紙……JAPAN の文字。「お前、これは忘れちゃだめだろ」と店主は笑みを浮かべた。「グジャラート、すげえ！」現金なもので、僕は心の底からそう思った。

「それはさ、君がデリーに魅了されてるのを見て「やばい」と思ったグジャラートの神様の差し金だよ」

僕の話聞いてこう言った人がいる。なるほど。僕はグジャラートの神様に気に入られているみたいだ。つまり僕をここに呼んだのはそいつらしい。こんな辺鄙なところに、迷惑な話だ。でも、おかげでパスポートも帰ってきたし、住んでも都じゃないけど、いいところもあるのかもしれない。もうしばらくここに住めば、都になるのかもしれない。

呼ばれてしまった以上、僕はもうちょっとこの「都」建設予定地にいるつもりである。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。